

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代ヘブライ語における〈LAMED + 代名詞〉の意味論的考察
Author(s)	阿部, 節子
Citation	ニダバ, 28 : 1 - 8
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048040
Right	
Relation	



現代ヘブライ語における < LAMED + 代名詞 > の意味論的考察

阿 部 節 子

現代ヘブライ語における<LAMED + 代名詞>は、英語における<to + 代名詞>に相当し、ten li et ha-sefer (give me the book) のように代名詞は他動詞の間接目的語として、あるいは halak lah (he went to her) のように動作が赴く方向を示す副詞句としての機能を持つ。また、yeš lo koba (there is to him a hat = he has a hat) や hayah lahem mazal (there was to them luck = they had luck) のように所有者を表す。これらは、聖書を記述した時代から今日に至るまで、ヘブライ語全体を通して見られる一般的な語法である。

ところが、このような基本的な語法に当てはまらない<LAMED + 代名詞>が現代ヘブライ語、特に口語において認められる場合がある。例えば、ha-tinok šuv xala lanu (the baby became sick again to us)、hu' hoci' lah et ha-nešamah (he opened up to her the soul)、'acuv lah (it is sad to her)、hu' hitrocec lo la-rexov (he ran to himself in the street) などに見られる<LAMED + 代名詞>は、統語論的には解りにくい奇妙な存在である。それらは、文において必要のない存在に見える。ヘブライ語ではそのような言い方をするのだ、と言ってしまえば簡単であるが、後述するように、同じような意味のことを、違う言い方で表現する場合もあるという事実に着目すれば、このような<LAMED + 代名詞>が文において何らかの意味論的な役割を果たしているのではないかと考えられる。

1. (1) dan ne'lam li pit'om meha-'ofek
 (Dan disappeared to me suddenly from the horizon)
- (2) ha-yeled tamid kam lanu mukdam bešabat
 (the child always gets up to us early on the weekend)
- (3) ha-kir ha-zeh 'alul lipol lakem kol rega
 (this wall might fall to you any moment)
- (4) cemax ka-zeh yigdal lak bli be'ayot
 (such plant will grow to you without any problem)
- (5) hi' lo' taxleh li axšav

(she doesn't get sick to me now)

上に挙げた文 1. (1)～(5)に共通しているのは、統語論的には不必要と思われる<LAMED + 代名詞>の存在である。まず、(1)において「突然姿を消す」という動作は、主語である「ダン」独自の動作であって、話者である「私」がその動作に参加したり、影響を与えたりしているわけではない。それ故、「私」は「ダン」にとって無用の存在であると言ってよい。それにもかかわらず *li* が置かれているのは何故か。同様に(2)(3)(4)(5)においても *lanu*, *lakem*, *lak*, *li* がそれぞれの主語の動作に参加していないにもかかわらず、文中に存在する理由は何か。

このようなヘブライ語表現に類似する語法は、フランス語においても認められる。

Je te bois dix pastis en trois minutes.

Paul m'a encore enflé depuis deux jours.

これらの文において、代名詞の与格 *te* と *me* は主語の動作に加わってはならず、したがって統語論的には不必要な要素である。C. Leclère によれば、このような代名詞与格は“*temoin*” (傍観者)として文に意味を添えていると言う。¹ 即ち、代名詞与格は主語の動作に参加してはいないが、主語の動作に関心を持ち、それによって影響を受ける立場にある、と話者が感じていることを示唆していると考えられる。

英語においては、古風で俗語的な表現の中に類似の表現が認められる。但し、主語との関係を明確にするために、代名詞与格は *on* や *from* などの前置詞を伴うことが多い。

Is not enough that you have hurt me down three houses with your dog's trick?

You've lost us the best place a family ever had.

Whip me such honest knaves.

I'll do you your master what good I can.

Inquire me first what Danskers are at Paris.

ヨーロッパの言語に見られるこのような代名詞は心性与格 (ethical dative) あるいは感興与格 (affective dative) と呼ばれ、虚辞的なものである。心性与格は、叙述する事柄に話者が興味を持っていること、あるいは聴者がそのことに興味をもっていることを表現して、叙述に生気を与えようとする語法である。ethical dative という呼び名はラテン語の *dativus ethicus* の訳であるが、そのことからわかるように、このような語法はラテン語やギリシア語によく見られる。²

前述のヘブライ語文について言えば、1. (5) の主語「彼女」の動作/状態に対して話者「私」が主観的、個人的な感興を抱いていることを読み取ることができよう。それ故、「彼女」と「私」が患者と医師あるいは看護婦といった単なる職業上の間柄である場合には、このような言い方はしないと言えるかもしれない。その他の文も、表面的に見れば客観的な事実を述べているだけであるが、主語「ダン」が地平線上から姿を消したことが

話者「私」の心に強く印象づけられたこと(1)、主語「子供」がせっかくゆっくりしたい週末の朝に早起きすることに対して、話者「私達」がいまましい思いを抱いていること(2)、主語「壁」が今にも崩落して、聴者「あなたがた」に被害が及ぶかもしれないこと(3)、主語「植物」が手をかけなくても育ち、聴者「あなた」にとって楽であること(4)など、主語の動作/状態から受ける喜び、悲しみ、安堵、不安といった心的影響を<LAMED + 代名詞>によって表現しているのではないかと考えられる。

2. (1) kar lo

(cold to him = it's cold to him)

(2) kašeh li le-'ehov oto

(hard for me to like him = it's hard for me to like him)

(3) xaval lanu še hu' nixšal

(pity to us that he failed = we are sorry that he failed)

(4) hayah xašuv lo le-hagi'a ba-zeman

(it was important for him to arrive on time)

上の2.(1)~(4)はそれぞれ stative predicate で始まっているが、文中<LAMED + 代名詞>は predicate が述べている事柄の経験者を指している。例えば、(1)において predicate「寒い」は外的状況である気温について述べており、「彼」はそのような状況の経験者、つまり「寒い」と感じている者を表している。

このような<LAMED + 代名詞>は、いわゆる引照の与格 (dative of reference) に相当すると思われる。引照の与格とは、叙述されている事柄を真実だと思う人、あるいはその事柄が適用される人を示す。³

Bid them seek actions that seem them better.

It took him ten years to do it.

The hat cost her fifty dollars.

I bet you five dollars that you can't do it.

もっとも、このような引照の与格は17世紀以降、次のように、to や for を伴う句で表現される場合が多い。

She appears to me very honest.

The dress is too long for you.

一方、ヘブライ語文において stative predicate が自己の内に起因する経験である場合には、経験者を主語として文頭に置くのが普通である。

3. (1) 'ani ra'ev (I am hungry)

(2) hi' 'acuvah (she is sad)

(3) momo 'ayefah (Momo is tired)

ところが、最近イスラエルの子供達の会話において、次のような言い方が目立つという。⁴

- *ra'ev li (hungry to me = I'm hungry)
- *'acuvah lemomo (sad to Momo = Momo is sad)
- *ko'ev li (hurt to me = I am hurt)
- *meša'amem li (bored to me = I am bored)

以下に示す4. (1)～(4)の文は、基本的には2、3と同じように<LAMED + 代名詞>を叙述されている事柄の経験者として表す例である。

- 4. (1) 'avad lo ha-tik
(lost to him the file = the file got lost on him = he lost the file)
- (2) lo yadu'a lahem hexan hu'
(not known to them where he = they don't know where he is)
- (3) lo mistaber lanu 'im ha-šitah ha-xadašah
(it isn't working out to us with the new method = we aren't managing with the new method)
- (4) hitbalbel li la-bexinah
(things got mixed up for me in the exam = I got mixed up in the exam)

それ故、これらは経験者を主語として次のように書き換えることができる。

- 5. (1) hu' 'ibed et ha-tik
- (2) hem 'enam yod'im hexan hu'
- (3) 'anaxnu 'enenu mistabrim 'im ha-šitah ha-xadašah
- (4) 'ani hitbalbel la-bexinah

4と5の文を比較してみると、4では本来主語であるべき代名詞が<LAMED + 代名詞>として経験者の立場をとっている。即ち、動作主としてではなく、動作から影響を受ける者として表現されていると言えよう。動作主を明確にしない文には、4の文が示すように、自動詞あるいは受動態が用いられる場合が多い。このような動詞は意志的な動作を表現しないので、主語を単に経験者、被行為者のようにしか言わない文に適している。そのせいか、子供が自分の責任を取りたくない気持ちを表現して、次のような言い方をする場合がある。⁵

- 6. (1) nišbar li ha-sefel (broke to me the cup = I broke the cup)
- (2) ne'ebdu lanu ha-maftexot (got lost to us the keys = we lost the keys)

possessive を表す場合の<LAMED + 代名詞>も同様の意味論的な解釈ができるのではないだろうか。ヘブライ語にはいわゆる have 動詞がないので、yeš li ha-sefer (there is to me the book = I have the book) あるいは 'en lo ha-sefer (there is not to

him the book) といった言い方をする。しかし、次の例に見るように、yeš や hayah のような自動詞に直接目的を示す et (object marker = OM)を伴う場合がある。

7. (1) yeš li et ha-sefer (there is to me OM the book = I have the book)
(2) hayah lanu et ha-'omec (was to us OM the courage = we had the courage)

これらの文において、li と lanu は意味の上ではそれぞれの文の主語である。そのため、自動詞 yeš と hayah の影が薄くなってしまつて<yeš + LAMED>や<hayah + LAMED>がまるで have 動詞であるかのような印象を与えてしまうのかもしれない。また、そのような印象を与える要因のひとつとして、ヨーロッパの言語からの影響が考えられるかもしれない。

possessive は、次のような文によつても表現される。

8. (1) 'ima raxacah lo et ha-panim
(Mom washed to him OM the face = Mom washed his face)
(2) 'ani 'exboš lekah et ha-yad
(I'll bandage to you OM the hand = I'll bandage your hand)
(3) 'ima kifterah lah et ha-seveder
(Mom buttoned to her OM the sweater = Mom buttoned her sweater)
(4) lama 'atem mitlaxlexim li et ha-šatix
(why do you dirty to me OM the carpet = why do you dirty my carpet)

このような語法は英語にも見られる。

She looked me in the eyes.

I struck him on the head.

He caught me by the arm.

これらを、それぞれ She looked in my eyes、I struck his head、He caught my arm と比較してみると、前者には情的な性格が感じられる。目的語である被行為者に、主語である行為者の関心が強く寄せられているという感情的な色彩が濃い。⁶

同様の表現は、ドイツ語において所有の与格あるいは交感の与格と呼ばれる語法として一般的である。

Er sah mir in die Augen.

Ich schüttelte ihm die Hand.

Eine Träne hängt ihr an den Wimpern.

Die Sonne scheint mir ins Gesicht.

先に挙げた 8. (1)～(4)は、possessive を表す関係詞を用いて次のように書き換えることができる。

9. (1) 'ima raxacah et ha-panim še-lo

(Mom washed OM the face which to him = Mom washed his face)

(2) 'ani 'exboš et ha-yad še-lekah

(I'll bandage OM the hand which to you = I'll bandage your hand)

(3) 'ima kiferah et ha-seveder še-lah

(Mom buttoned OM the sweater which to her=Mom buttoned her sweater)

(4) lama 'atem mitlaxlexim et ha-šatiax še-li

(why do you dirty OM the carpet which to me = why do you dirty my carpet)

8と9の文は表面的には同じ意味であるが、主語の行為と、8において <LAMED + 代名詞>によって、9において関係詞によって表現されている所有者との関係には微妙な差がある。8の文からは主語の行為と所有者との関係が緊密であることが伝わってくる。即ち、<LAMED + 代名詞>によって表されている所有者が、主語の行為から影響を受けることに力点を置いた言い方である。これに対して、9の文は単に所有者を明らかにしただけの neutral な表現であると言える。例えば、8.(1)と(2)は共に身体の部分について述べているが、母親が彼の顔を洗うことについての「母親」と「彼」の気持ち、あるいは包帯を巻く「私」と巻かれる「あなた」との間に通い合う心情が伝わってくるような表現である。8.(3)では、セーターのボタンをかける母親の行為と彼女との関わりに聴者の注意が促されている。とすれば、そのセーターは現に彼女が着ているセーターであろう。一方、9.(3)の文で大切なのは、誰のセーターかということだけである。したがって、「ボタンをかける」のは、まだ彼女に着せていない畳んだままのセーターかもしれないし、ことによると彼女がその場にはいない時であるかもしれない。要するに、母親の行為と彼女との個人的な関わりや心情については何も示唆されていない。8.(4)と9.(4)の対比についても同様の解釈ができよう。即ち、9.(4)はカーペットが「私」のカーペットであることを伝えているにすぎないが、8.(4)では、「あなた」が、ほかでもない「私」のカーペットを汚したことが重大問題なのである。

10. (1) dan ne'lam lo pit'om me- ha-' ofek

(Dan disappeared to himself suddenly from the horizon)

(2) ha-yeladim histalku lahem

(the children ran away to themselves)

(3) momo yešvah lah ba-pinah ve baxtah

(Momo sat to herself in the corner and wept)

(4) lama 'ata raz lexa ba-rexov

(why do you run to yourself in the street)

(5) 'ani sixakti li šam

(I played to myself there)

(6) dan mitnapeax lo mi-yom le-yom

(Dan gets fat to himself day by day)

(7) he-ineyanim yistadru lahem be-mesex ha-zeman

(the matters will settle to themselves in the course of time)

上の文において、<LAMED + 代名詞>は reflexive として用いられている。動詞は自動詞が多いが、次に示すように、他動詞の場合もある。

1 1. (1) šavarti li et ha-kad

(I broke to myself OM the vase = I broke the vase)

(2) 'ata xayav le-sader laxa et ha-ineyanim

(you have to arrange to yourself OM the matters = you have to arrange the matters)

このような reflexive はヘブライ語における慣用的な表現であり、特に意識された言い方ではないかもしれない。しかしながら、<LAMED + 代名詞>によって表現される被行為者が受ける影響が、何か他のものから受けるのではなく、自分自身のうちにある本質的なものであることを表すという観点から reflexive を解釈することも可能である。

聖書ヘブライ語における<LAMED + 代名詞> reflexive は主語の行為を強調する働きがあると言われる。⁷ ここで言う「強調」とは、統語論的には必要ないが、意味論的には存在意義があるということであろう。つまり、話者の「思い入れ」のある言い方のことであり、それはとりもなおさず先に述べた心性的与格の機能に相当する。但し、聖書ヘブライ語において、このような reflexive はほとんどの場合命令文の二人称代名詞である。

1 2. (1) lex lexa (go to yourself = get thee away)

(2) 'ibru laxem (pass over to yourselves = pass ye over)

(3) kumi lax (rise to yourself = get thee up)

以上、現代ヘブライ語における<LAMED + 代名詞>をいくつかの類型に分けて検証を試みた。その結果、これらの類型に共通する意味論的な特徴は、心性的な効果にあるのではないかと考えられる。即ち、統語論的に必要な構成要素ではないが、話者の情感を示唆することによって文の感性を深めているのである。このような<LAMED + 代名詞>には、

(1) 主語の行為とは何の関係もないように見えながら、話者の目には関わりがあり、影響を受けているように映るもの、(2) 周囲の状況と関わり、それを自己の経験として受け入れているもの、(3) 主語の行為の対象となっているもの、(4) 行為者本人としてその行為に本質的な関わりを持つものなど、類型によって、主語の行為と<LAMED + 代名詞>によって表現されているものとの関わり具合はそれぞれ異なっているが、この「主語の行為との関わり」こそが、<LAMED + 代名詞>に共通する意味論的機能ではないかと考えられる。

現代ヘブライ語、特に口語において、このような語法が目立っている理由は明らかでは

ないが、現代ヘブライ語が成立した当初は純粋に機能的な言語で満足していた人々が、時が経つにつれて、自分達の言語にもっと感性的な味わいを求めるようになったこと、新たに帰還した人々と共に入ってきたヨーロッパの言語の影響を受けたことなどが原因しているのかもしれない。

(注)

- ¹ C. Leclère, "Datifs syntaxiques et datif éthique," *Rapport de Recherches, Laboratoire d'Automatique Documentaire et Linguistique*, 5 (Université de Paris, 1975), pp.25-58.
- ² 「現代言語学事典」成美堂, 1988, p.148; 「Dictionary of English Grammar」三省堂 1957, pp.404-405; 「新英語学事典」研究社, 1983, p.405; 宮部菊男著「格と人称」研究社, 1954, pp.87-88; 山田巖著「英文法講義」研究社, 1956, p.244; 「精鋭英文法汎論」篠崎書林, 1979, pp.246-251 等を参照。
- ³ 宮部菊男著「格と人称」研究社, 1956, pp.88-89; 「新英語学事典」研究社, 1983, p.285 を参照。
- ⁴ R. Berman, "Acquisition of Hebrew," *Cross-Linguistic Study of Child Language*, 11 (1982), p.78.
- ⁵ 上掲書, p.79.
- ⁶ 「新英語学事典」研究社, 1983, p.287.
- ⁷ Gesenius, *Gesenius' Hebrew Grammar*, ed. by E.Kautsch, rev. by A. E. Cowley (Oxford: Oxford University Press, 1910), p.381.